
ライクナイフ

まち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライクナイフ

【Nコード】

N5520A

【作者名】

まち

【あらすじ】

あたしはナイフが好き。キスよりセックスよりナイフが大好き。あんたに似てるから。

ブローグ

銀のきらめきは好き。

鈍い色もまあまあ。

柄がどんな形だろうが刃渡りがどれだけの長さだろうが、あたしはコレがあれば別にそれで良い。

「ねえ」

背中しか向けないから仕方なく、背中に。好き、って言ったら、急にキモいって言われた。

別にそれで構わない。冷たくて鋭いあんに、あたしはぞくぞくしてる。

プロローグ（後書き）

そういえば好きなんて言葉あたしは言わない。

一話 ヒナゲシ

「コレ可愛い」

アキがそう言ったから、その先を見つめた。

それはそれはあたしより全然高いビルの一階の、通りに面したウインドウ。そこに真つ白なマネキンがいて、誇らしげに服を着てた。黒いシャツに白いパンツに、その店では置いてないはずのなんか良く分からない犬の置物。

足が極端に短いし、目がでかすぎて気持ち悪い。

「服この前買ったじゃん」

「でも可愛いーいくらかな？ 一万までなら出す」

「持ってるの？」

「いや、賢ちゃんが出す」

「うわ。ひで」

別に酷くないしー。

間延びしたあくびみたいな声で、アキはショップに入っていく。

「いらっしゃいませえ」

やたらと高い店員の声にイラッときたけどシカトして。

あたしは小物を見に、アキは店員とディスプレイのどこに向かう。

「コレ可愛いんですけど」

「でしょー？ それ今売れてますよ、色違いでこちらにあるんですけどお」

きやあきやあ言つて店の中を横切る。
ありや後で店員がうざかったってあたしに言つんだろつなあアキ
わ。

「何かお探しですかあ？」

隣りがむわつと臭くなつた。

ここまで酷い香水の匂いは久しぶりに嗅いだ。
ブルガリの匂い。

ブルガリがこんなに嫌な匂いつて思うなんて。

「いや別に。付き添いです」

「そうですかあ」

あたしが軽く追い払つたみたいになつた。

でも今日はあんまり人に話しかけられたくない。

「ねえハルカあ、賢治呼んだら怒る？」

いや店の端から端で話したら周りうつさいから。

あたしは別に良いよってひらひら手を振ってやる。
伝わったかな。

「賢治ねえ、ハルカいないと来んて言つたからハルカ構つてやつて
え」

服を買つたらしくて、そのままレジに向かうアキがあたしの横を
通り過ぎる。

「あんたの彼氏なのに」

「ハルカは賢治取らんでしょ！ 前コレ浮気？ って賢治からまじ顔で聞かれた」

「……そう」

「浮気じゃないよねえ、ハルカ美人だから許す。男が放っておかんわけよ」

意味分かん。

でも、その賢治君を待たずに服買ったの。

アキが彼氏を大事にしてるかしてないかはあたしには計り知れない。

高二で付き合い始めた二人は二年くらい続いてる。

二年で。あたしにはどうしたら二年も付き合えるか想像もつかない。

賢治君は専門学生。アキはあたしと同じ大学生。

合コンで出会ったにしては二年で……。

「ココ名前なんていう？ あ、電話かかってきた」

「何が？」

「あ、賢ちゃん？ うん、今ハルカと買い物してた。えと……HI N A G E S H I……ヒナゲシ？ にいるよ」

あたしが店の名前を確かめるより先に、アキは賢治君に居場所を教える。

「え、飯？ 行く、行く！」

飯？ さっきスタバでベーグル食べてたのに！

あたしは内心突っ込んでから、ふと店の名前を見た。

ヒナゲシ、って変な名前。

ローマ字？

店内は白を基調にしたコンクリ造りの、美容室みたいになってる。

アルミで包んだ柱が何本か突き出てるけど、それが味があってオシヤレ。

ヒナゲシ。

……ヒナゲシ。

そういえば、ヒナゲシってどんな花だったっけ？

一話 ヒナゲシ（後書き）

何色の花だったか知らない。

見た事はきつとあると思うけど。

二話 ピアス

「ハルカちゃん久〜」

「いや昨日会ったじゃん、バス一緒だったよ」

「あ、そだっけ？」

賢治君がしばらくして合流した時は、店を出て、なんとかついでにパスタの店にいた。

賢治君はとにかく背が高く、理屈抜きでかつこいい。バスケットら伸びたって聞いたけど、バスケット部に入ってたわけじゃないらしい。

部活はやめて、絶対似合わないって笑ったら、賢治君も笑った。

今日は黒っぽい服着てる。新しい靴だと言って紹介した靴は、目が飛び出るかと思うくらい高い靴だった。

「いらっしゃいませえ」

「いらっしゃいましたあ」

愛想悪い店員に、愛想悪く絡んだ賢治君を、アキが慌てて止める。なんかかなり二人は仲が良い。あたし二人見てるの好き。

ところで店内はがらり。

こりや近々潰れるんじゃない？

適当に座ったら水が運ばれてくる。まだ五月なのにこんなに氷入れたら下すわ、ってくらいコップには半分以上氷。

「何食べる？ 今日はいち物付き合ってくれたからあたし奢るよ」

「うそ、アキ優しいねえ」

賢治君が奢られる立場に早変わり。

あたしはとつさに辞退する。奢られるのあんまり好きじゃないから、今日は親から金もらってたし。

「そ？　じゃあデザートあげるよ」

「マジでえ？　やったね」

「賢ちゃんにはさつきから言っただけだよ？」

アキが笑った。

あたしもつられて笑う。

あたしはシーザーサラダを頼んだ。野菜が食べたくて頼んだのに、アキがダイエット中って聞いてきた。

いや、してないから。

アキはカルボナーラ頼んで、賢治君がボロネーゼを頼む。

夜はここで済ませるみたい。

「アキもダイエットしないの？」

気怠い口調で賢治君が聞くと、しないしなあってアキは笑った。だってしなくて良いよ、それ以上肉取ったらアキ骨と皮だけになっちゃうから。

あたしは身長が163ある。

アキは157。

この差はでかくてアキがスカートはくと可愛いんだコレが。

あたしはいつもパンツしかはかない。だって似合わないんだよなあ、なんか。

くるくるロールはアキに似合ってた、あたしは良くアキの髪触る。そういえば小さい頃は美容師になりたかったけど、今はそんなに思わない。だから時々アキの髪触るだけで良い。

「あ、ピアスの穴増えた？」

「え？ ああ、昨日病院行っただ」

賢治君がふと声をかける。

あたしのピアスホールがいくつあるか知ってたの？

「右に二個、左に三個じゃね」

「そうそう。……でもなんか昨日開けた後になってそろそろ飽きたかもって思った」

かなり金に近いあたしの髪が耳を邪魔してたから、右を紹介するように髪を上げる。

「穴開けるの前は好きだったんだけど今そうでもない」

「うわマゾか」

「マゾで」

賢治君は柔らかく笑って、携帯に目を向けた。

今時の曲じゃない珍しい着信音が鳴ったから。

なんだろ、コレ。

そんなに激しい曲じゃなくて……。

「ハルカあ、ちょっと化粧室って来る」

「ん、行つてら」

アキはアキでトイレに行つたから、あたしは一人になった感じでした。

着信音が何の曲だったか考えてる。

ちよっと暗い、多分歌じゃない。歌詞がない……クラシック？

「ねえハルカちゃん耳貸して」

いきなり賢治君が顔を上げた。

「貸したくない」

「良いから、良い事教えただげるから」

着信音にも、メールか電話が着た事にも気付いたのに、賢治君は携帯を放って、席を立ち上がる。

貸す気なかったのに、もうあたしの耳元にいる。

「何よ、良い事？」

「俺には」

イイコト。

窓側の席で、ちょっと出っ張りから影になつた場所。

その影をもう一つ覆うようにして、賢治君の腕が、あたしのイスに落ちる。

ちよつとした密室空間？

ナニ？

って言おうとした時には遅かった。

くちや、って音を、耳がひろった。

震えるような甘美な感覚に目を見開く。

「ちょ」

「ファースト取れたらまた舐めてイ？」

まだちよつとこころなし痛む耳の、ピアスの針を入れ込んだ穴辺りを舐められたのだ。「何がイイコトよ?」

あたしは呆然となつてしまった。

友達の彼氏に耳を舐められるなんて。

二話 ピアス（後書き）

傷つけられるのは構わないけど、優しい愛撫は勘弁して。

三話 ブラック

浅はかにも感じた。

あの陶酔は、なかなか得られない。

「何二人仲良しじゃんー賢治席まで立つたの？」

トイレから帰ってきたアキが、立ち上がってあたしと話してる（ように見えた）賢治君にちらりとヤキモチ。

「ハルカちゃんと俺普通に仲良いよ」

「そお？ 変な事しないでよねー」

「したくなったらするから妬かないでな」

もー！

ってアキが笑ったけど、ごめん。笑い事じゃないから。

あたしは浮気の範囲がかなり広い。今のを、あたしの彼氏がヤツてたらあたし絶対に別れた。

浮気するのは良いんだ。浮気は美德だあとか馬鹿なおっさんが前ほざいてたけど、うん。それならそれで良い。

でもあたしがされたら正直譲っちゃう。要らないよ、あげるよって。

今のは完璧賢治君が悪い。しばらく冷たくしてやる。

あたし達はその後料理をたいらげた。チエーンだし、潰れそなくらい人いなかったからてつきり不味いかと思ったけど、かなり美味しかった。

ごちそうさま。

あたしは二人と分かれた後、家にまっしぐらした。
今日は生理三日目でかなり下腹部が痛かったから。

歩く。

歩く。

止まる。

歩く。

なんかあたしが歩いてんじゃなくて、回りが歩いてるみたいない感じ。

人が背景になって流れる。流される。

嫌い。

これは好きじゃない。

家に帰る。

ドアを開ける。

だっ広い家に、生活臭が全く感じられなくて、また目まいがした。

ここはつい最近引っ越したマンションで、かなり新しい。綺麗だけど梱包したままの段ボールがそこかしこにちらばってる。

朝読んだ母親の置き手紙がそのままになってた。

コレでご飯を食べなさい、って五千円。

どんだけ食えばそんなかかるんだよ、って思ったけど、あたしは今日それ半分以上使った。

スタバとパスタで。

リビングのソファに腰を下ろす。

静かだなあ。

「あれ何の曲だっけ」

この空間に、音楽が流れるってのはどうだろう。

あたしはふとかなり良い事を思い付いたように目線を上げた。

豪華なシャンデリアと、真っ白な天井を眺めてから、溜め息をつく。

要らない。

この場所にあんな音楽が似合うわけない。

テレビをつける。

クイズ番組もバラエティも見たくない。ドラマは飽きた。

結局ニュースをつけっぱなしにしていた。社会勉強。

ピンポン。

「ん？」

その時チャイムが鳴った。

お母さん鍵忘れたんかな。

ピンポン。

ってまた鳴った。マジで誰。

あたしは不機嫌になったから居留守使ってやろうと思った。

でもそのチャイム、壊れるぞってくらい鳴り始めた。ピンポ―

ンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン！

「タコがつ！んな連打しまくんな」

あたしはもう完璧に切れて、ソファから立ち上がるとチーンもかけずにドアを開けた。

これはちよつと失敗したと思った。

「何すか」

ガチャって乾いた音を立てて、鍵が開いた瞬間、ノブを握ってたあたしごとく、ぐいと引かれた。扉が開く。

「聞こえてるならさっさと開ける」
「な」

誰？　って顔を上げた瞬間、あたしの目は点になった。

か、っこいい。
けど、知らない人。

で、服が変。割とかちつとしたタイプのスーツを着てるんだけど、それがかなりぼろぼろになってる。
ついさっきから雨降ってたから濡れてるのは分かるけど。

「あの……」

「客か？」

「客？」

「……カイは来てるのか」

「誰それ」

あたしはもう完全にきょどった。

「……お宅さん誰？」

あんたこそ誰？

あたしはただただ立ち尽くした。

三話 ブラック（後書き）

夜で、雨で。アンタのスーツの色は黒だったよね。

四話 キス

「岩下だけど。岩下ハルカ」

「……………」

驚いたあたしの後に、今度はそいつが驚いたのを見て、あたしはちよっとおかしくなった。

間違えたんだ、コイツ。ベタな話で、あたしらが最近越してきたから、前に住んでた奴と勘違いしてんだ。

「悪い、人違い」

「でしょーこの家まだ三か月も住んでないもん」

一瞬男は途方もない顔になった。

あたしは、チャイム連打するような相手じゃないから憤りも吐けないだろうし。

「お兄さんホスト？」

「まさか。何で」

「や、スーツ珍しいし。顔良いし」

ホストみたいっていうか、とにかく今時のかつこいって顔。

照れたり、嫌がったり何もしないで、男はドアから手を離そうとした。

もう帰っちゃうのか。

「ね、今まだ雨だからウチ入ってなよ」

うわ。

やばい、あたし軽い？

なんかね、その時はちょっとおかしかったんだ。

だってソイツ変なんだもん。めちゃくちゃ目付き悪いし態度悪いし、顔かつこいいし。なのに何か雰囲気飲まれた。何されても良いよって思った。

「じゃあお言葉に甘えて」

嘲笑、に近い笑みを向けられる。

それは快感にも似てあたしに降りかかった。やばいよ。

落ちるかもしれない。

あたしは背伸びして、男の唇を奪ってた。キスしたかったから。

恥ずかしい。

抗いたい。

抗えない。

初対面の人に、こんな。

「舌は？」

「……ん……」

陶酔に酔ってたあたしは、うつろに目をあげる。

「舌は入れないのか、お嬢様」

「！……っん……っ」

あたしはその後めちやくちゃディープにキスされてた。
舌が絡み付いて、口ん中やラれてた。
やばい、やばい、やばい。絶対やばい。

『一目ぼれ』

なんてキモくて言えない。

あたしの長い髪、は。そいつの手で触れられた。
暗めの茶色にしてって言ったってどうしても赤くなっちゃう困った髪。

しゅくもーかけまくって色ぬきまくってあんまり綺麗じゃない髪。

「ガキだな、ママはまだ帰ってこないのか」

ふと目をあげる。

男と目が合う。

お言葉に甘えるなんて言ったのに、男は笑って出ていった。
笑い方、好き。
可愛いつて言ったら変だけど。

部屋に一人。

家に一人。

母はとうぶん。

帰ってこない。

四話 キス（後書き）

キスはレモン味、なんて言っ
た変態に会ってみたい。

五話 アカマル

どうかしてる。

さつきからずっと、あたしはあの名前も知らない男の顔や仕草を
思い出していた。

恥ずかしい。

頬が額が全身がほてる。熱くて熱くて、でもそれが全然不快じゃない。

また会えたら良いなあ。

名前だけでも聞いてたら良かった。

あたしはソファに沈んで、ぼんやり天井を見上げる。

雨はとにかく本降りで、雨音が煩わしい。

普段はあんまり見ない携帯の画面に十七件もお知らせが入ってて
びびった。

寂しくて見た携帯のせいで、ウザくなった。

×××

雨降ってるから嫌だったけど、あたしは煙草買いに行こうって傘
さして、また外に出た。

煙草は実は全然吸わない。賢治君がヘビーらしいけど、それもど
うでも良くて。

煙草が欲しかったのは……。

自販機は嫌。

コンビニも嫌。

スーパーは死んでも嫌。

……もう選択肢なくなつた？

あたしは暗いのに黒の傘で、今日のてぃーしゃつも黒で、気分はちつとも明るくない。

「ねえねえ、何してんのー？」

「ん？」

うつろ目的もなく彷徨うあたしに声をかける奴がいた。

え。雨なのにナンパ？

まあ夜だし小雨だし。

「あ、賢治君」

振り返つたら賢治君がいた。ナンパかと思うくらい気急ぐて軽い口調だからてつきり。

「めちゃくちや濡れてるじゃん！」

「やーあれからアキと一緒にラブラブしてたら今日アレの日だって逃げられたー」

「生々しいからやめてよ」

アキも生理だったの。

あたしは生々しいカップルの小ネタを聞いても、だから何で賢治君がずぶ濡れでうつろっているのかは分からなかった。

「ハルカちゃんは何してんのさ」

「んー……」

正直に煙草買いに来たって言いたかったけど、何か言いたくない。
言葉をにこす。
沈黙が降る。

「煙草、何吸ってんの？」

「んー？ 煙草？」

あたしは本当煙草は吸わないから、賢治君がちょっと驚いた。

「え、目覚めちゃったの？」

「何に」

「煙草の世界」

どこよ、それ。

あたしは肩をすくめる。結局何であたしが煙草買いに来たとか言いたくなかったのか分からないまま答えてしまう。

「女の子だからねー、しかもハルカちゃんだからねー」

近くにあった煙草の自販機の前で止まって、賢治君は自販機の左隅を指した。

ついちよつと前に出た紫色のパッケージの煙草。

「コレはあ？」

「んー……」

決め手にかけた。

女の子、男の子に分けたらダメなの。

「じゃあこっちは？」

今度はピンクを指したけど、あたしは両方却下した。

「賢治君は何吸ってんの？」

「俺え？ 俺あんまりコレっていった銘柄は吸わんけど、今日はアカマル持つてる」

マルボロかあ。

中途半端な赤と、中途半端に親切な注意書き。

気怠くて無気力な手から差し出された煙草は、鋭かった。
鋭利で、ギラギラしてる。

あたしはじゃあそれ買うつて。言つてた。

五話 アカマル（後書き）

煙草の味がしたから。吸ってみたかったの。

六話 カレシ

「アカマルって結構すごいけど大丈夫？」

「すごいって何が？」

もうチャラチャラって小銭突っ込んであたしは煙草を手にした後だけに、賢治君が言う。

「タールの量とか」

「良いよ、何でも」

「吸ってみたいだけなら俺のやるのに」

「箱が欲しかったの」

これ実は嘘じゃない。煙草ってちょっとだけ大人な気分になれる気がする。

あたしはまだ十九で、煙草は吸えない年だけど、十九で吸いたいけど吸ってませーんて人はいないよね。

あたしは吸わなくて良いから今まで吸わなかったから、やっぱり煙草がちよっと背伸びしたように思えるのはそのせい。

「箱可愛いのならやっぱりローズとかが良かったんじゃない？」

まあ良いけどーって、賢治君は笑った。

傘を彼が持つて、あたしと肩を並べて帰る。

175センチあるらしい。175が男の中でどれくらいの背なのかは知らないけど、あたしは高いと思う。

あの人って175以上あったかな。

あたしはちよっと考えて、賢治君の頭らへんをガン見。

「なあに？」

「ううん」

賢治君は笑ったけど、あたしは別に笑わずに考えてた。

もう一つ考えてたのは、マンションまで賢治君が送ってくれてる事。

「送らなくて良かったのに……」

「いや実は傘に入りたかった」

嘘つき。

賢治君の家は全然逆方向だから、今は確かに傘入って濡れてないけど帰りがけ濡れるじゃん。

あたしのウチ傘あったかなあ。ちょっと可愛いけどこの傘貸せばいいかなあ。

あたしは傘の中の密室で傘の事を考えてた。

ドキドキはしなかったけど、ちょっと照れる。

浮気性の元カレをフツてから、三か月たってた。あたしはからからに干からびたみたいに思ったけど、体は賢治君を男の一人として数えてないみたい。

キスしたり、抱き合ったりちつともしたいと思わないから。

まあ友達の彼氏とだけは絶対に良い雰囲気になりたくないんだけど。

雨は小雨。

じとじと気持ち悪い。

「ねえねえハルカちゃん、茶あ飲みたい」

「玄関先なら良いよ」

あたしはニツコリ。

賢治君に下心があつたかはいかは分からないけど、お母さんが帰ってくるかもって不安はなかった。

そうじゃない。

「家には彼氏しかいないの」

あたしは笑う。

玄関なら良いよ、でもそれならやっぱり帰った方が良いんじゃない？

あたしは賢治君がどんな反応するか見てたけど、だから送つてもらうの悪いって思ったんだけど、賢治君は全然予想外の言葉を話した。

「じゃあ良いや、玄関先までいれられたら俺オケだと思ってるから」

「何それ、狼さん？」

実際そんな可愛いもんじゃないだろうなあ、彼は。

「浮気もほどほどにしてよー？ アキ知ってたから」

アキから聞くには賢治君は浮気してるって疑惑。知らないけどね。

そしたら賢治君はきょとん。

「浮気とかしてないよーなんで浮気になんのさ」

またコイツは。

「だって……」

「なんで」

「なんでって……」

「賢治って呼んでよ」

「は？」

「俺の事賢治君って呼ぶじゃんね。呼び捨てで呼んでよ」

一瞬何を言われたのか分からなくなった。

名前、の呼び方なんて。

「……呼び捨てなんて出来ないよ」

慌てる。

否定する。

「彼氏しか……呼び捨て出来ないから」

「また彼氏限定？」

賢治君は今までの真剣な顔じゃなくなっていつもの気怠い笑みじゃなくなった。

けど、ふと考えるようにして、こぼすように言った。

「じゃあ彼氏にしちゃって」

「ちょ、アキはっ」

ああね。

って賢治君が言った。

「アキとはもう別れたんだけど」

聞かされてなかったの、っても言った。

六話 カレシ（後書き）

うん。

そんな事、知らなかったよ。

七話 テンランカイノエ

あまりにあっけに取られて、その話を聞きたくなくて、あたしは違う事を聞いていた。

「ねえ賢治君の着信って何の曲？」

「は？ え、もしかしてスルーなの？」

いや、気になって、って言葉を濁したけど、あたしはてんで上の空だった。

それより気になったのは違う事だったくせに。

「アキはなんて……」

俯いて、雨に濡れた袖をつまむ。

それに気付いて、賢治君は傘の場所をずらす。

「良いよって言った」

「……いつから……」

「もう別れてから一か月くらいなるよ」

「そう……」

あたしは飽きるのがすごく早い。

別れるのも早いし、実は良く相手に浮気される。

それでもアキと賢治君の関係はやっぱり憬れて、好きで、だから自分の恋愛なんかよりずっとショックをうけてた。そんなの。

「じゃあねえ、おやすみ」

いつの間にかあたし達はマンションについて、あたしは結構長

い事ぼんやりしてた事が分かった。

「ハルカちゃんごめんねえ」

「何が……？」

「いや、ぼんやりだから」

「謝らなくて良いじゃん」

そ？

あのね。

賢治君が言った。

「展覧会の絵って曲だよ、すげえ好きな曲なんだ」

そう言っで、ちょっとだけ彼は笑った。

×××

「あら、早かったのね」

帰ったら母親がいた。

あたしは家には誰もいないと思っていたから物凄く驚いた。

「お母さん、帰ってたの」

「ええ。……ご飯は？ もう食べたの？」

「外で食べた。……あ、そうだお金返すね」

あたしは鞆から財布を取ろうとした。

お母さんは慌てて首を振った。

「良いのよ、もらってなさい」

「ありがとう」

「それよりお母さんもう出るから、戸締まりちゃんとしてなさいよ」

また、どこかに行くのか。

あたしはなれっこだったし、一人の空間も好きだったから良かったんだけど。

今日だけは。

ベタベタした優しさは要らない。けど。

「おやすみ」

「あら、もう寝るのね。おやすみ」

明日は良い日になるといい。

良い日になれば。

今日はいろいろありすぎた。

展覧会の絵って歌が頭の中に流れて、それからあの名前も知らない男の事を考えてる。

ベッドに座って、二回目か三回目の、慣れてない煙草を吸った。

七話 テンランカイノエ（後書き）

まるで自慰するくらいの虚しさや、やられてるくらいの快感が、同
時にかけてぐった。

八話 サイカイ？

学校サボった。

大学の講義はなかなか適當。あたしはノートは友達に取ってもらって、良くサボったりしてる。

あんまり確定した未来があって、そのために頑張ってるわけじゃない。

今日は、アキの顔見れないし、あたしの顔を見せたくない。

だから、サボった。

携帯の電源は切ってる。昨日は心細かったのに、今日は一人が楽しい。

どこ行こう、何しよう。

あたしには時間がたくさんあって、あたしは自由だ。

ヒナゲシって店にもう一回行きたくて、いつもはあんまり出歩かない町をぶらぶらする。

良い天気。

昨日は雨降ってたから。

「おねえさん、一人？」

しばらく歩くと声をかけられた。だっばだばのスポン履いたピアスだらけの男。

身長が、ヒール履いたあたしと変わらない。

「一人になりたいから一人なの」

あたしは気分が良くて、声をかけた男を通り過ぎる。

一瞬きょとんってした顔が少しかわいかったかな？ でも年下は

ごめん。

ケーキが、食べたい。
ワンホール全部自分だけで食べたい。
一人で、たった一人で。

あたしは歩く。
歩いて歩いて、しばらくして。

ヒナゲシについた。

相変わらず、可愛い店なのに奥まって、回りにあんまり店がないせいか、ローカルな雰囲気しかない。

人はそんなにいない。
時間帯を考えるとそうかも。

「いらつしゃいませ」

店に入って、あたしを迎えた声は、男の人の声だった。
ウザイ店員より全然マシ。

あたしは右側から順に店内を回る。
パンツは持つてるから要らない。ジーンズはロールアップが欲しかったけど、ジーンズと靴だけは良い物を買いたいから、ブランドが良い。

上着は要らなくなる時期になったし、ていーしゃつはいっぱい持つてる。

あら？ あたし何でここ来たんだろ。

ヒナゲシって変わった名前の店だけど、とにかく店の雰囲気は好

きだった。

店員総入れ替えすりゃ良いのに。

「何かお探しですか」

昨日が特殊だったのか、落ち着いた男の声が隣りから聞こえる。
別に何も……

言いかけたあたしは目を見開いた。

「……！」

昨日の！

昨日の男が目の前にいた。昨日のとは違うみたいだけど、黒のス
ーツ着て接客してる。

「入ってきた時から気付いてたのにそっけないな」

とろけるような甘い微笑じゃない。どっちかっていうと常に嘲笑
に近い人を見下した笑い方をしてるんだけど、とにかくあたしはそ
の笑い方が好き。

あんなに嵐のように去っていった男なのに、あたしは全部覚えて
る。

今日は髪がぬれてない。昨日はちょっと濡れてたからか今日の固
めた髪がめっちゃエロいつて思った。

あたしより二、三歳上かな？ 二十歳ちょいすぎ、で髪が黒い。
髪が黒くて、ピアスが多い。

耳にじゃらじゃら舌にも空いてる。

マッドだけどもくない。やばいくらいかつこいい。

「店員？」

「いや、上で医者やってる」

「医者？」

「穴開ける医者」

穴って……。

「耳とかへそとか」

「ああ、なんだ」

「なんだって、何だと思った？」

あたしはちよつと考えて、確実に適格な言葉を吐いた。

「アンタが言うときサドっぽい」「サディストだからね」

あ、暴露しやがった。

八話 サイカイ？（後書き）

ちなみにあたしはどうしようもないマゾ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5520a/>

ライクナイフ

2010年12月14日20時43分発行